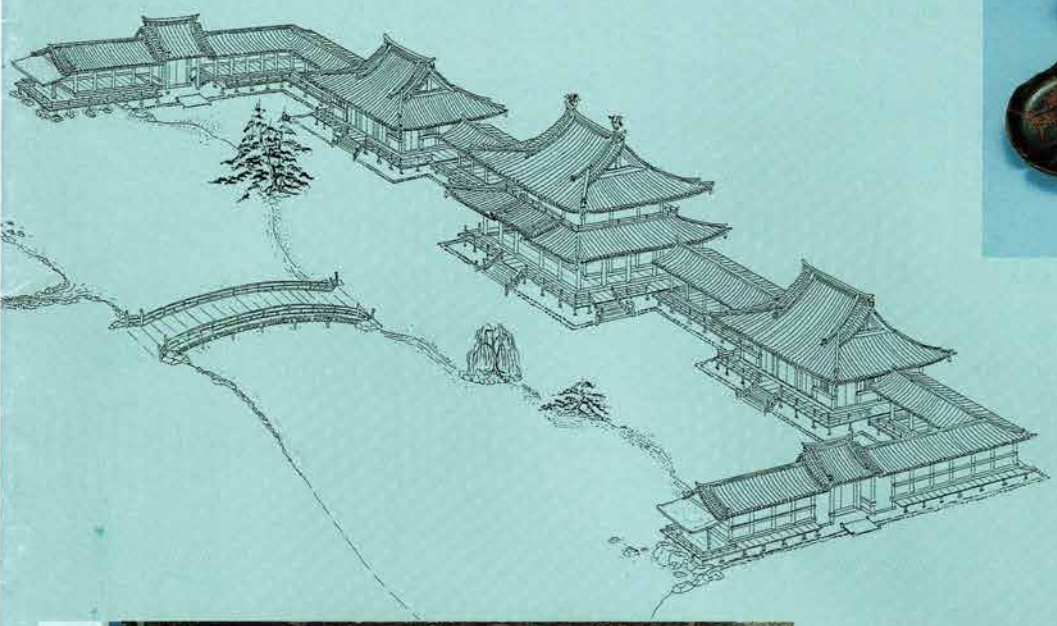
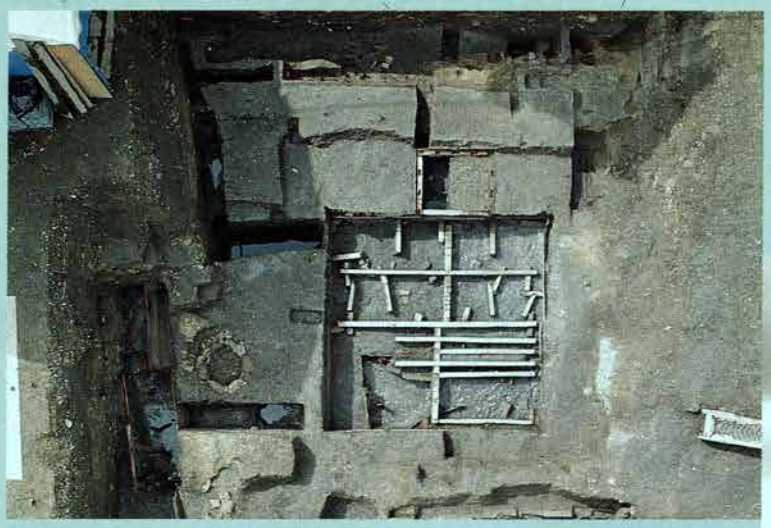
鎌倉の埋蔵文化財 1

発掘調査選集

昭和54年～平成７年分





平成８年３月

鎌倉市教育委員会

～はじめに～

本市は市民憲章で「わたくしたちは、鎌倉の歴史的遺産と自然及び生活環境を破壊から守り、責任をもってこれを後世に伝えます。」と定め、文化財の保護を重要課題としております。また教育委員会発行の『埋蔵文化財保護の手びき』では、鎌倉の魅力の根源は豊かな緑や美しい景観と文化財が一体となったところにあり、特に埋蔵文化財は、山稜部から市街地そして海岸線にまで広く存在し、自然環境や生活環境と一体となっていることに大きな特徴があると定義しました。鎌倉は文化財の面からも、優れた環境に恵まれているといえましょう。

教育委員会では昭和46年度から埋蔵文化財の本格的な発掘調査を、多くの方々のご協力を頂きながら実施してまいりました。本書は、それらの内の主な調査結果を紹介することにより、皆様のご助力にお応えしようとするものです。これからも様々な方法で発掘調査の成果を、お知らせするよう努めてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

～目　次～

1．中央平野部の遺跡群 …… 3
2．谷戸（やと）内の寺々の遺跡 …… 7
3．浜辺の遺跡群 …… 10
4．鎌倉をとりまく山々の遺跡 …… 12
5．埋蔵文化財の調査・保存・活用 …… 15

〈表紙写真の説明〉

1　国指定史跡永福寺跡の復原イラスト　木村春美画

2　市街地で発見された方形竪穴建築址

3　松谷寺跡やぐら

4　市街地の調査で発見された漆器

5　新善光寺跡内で発見された白磁四耳壺

6　武家屋敷の調査で発見された青磁の数々

～例　言～

◎本書では市内の発掘調査の主な事例を、時代や遺跡の立地別に編集しました。

◎紹介した遺跡は最近の調査事例を基本としましたが、特徴的な遺跡は少々古い時期の調査も取り上げました。

◎本書ではカラー写真をなるべく多く用い、また解説文も専門用語の使用をできるだけ避けて、より多くの方にお読み頂けるよう努めました。

◎本書の編集及び執筆は教育委員会文化財保護課が担当しました。また使用した写真等は当委員会の保管資料を用いました。

◎掲載した写真等の調査年次は、キャプションに明記しました。

◎本書の作成には、次の方々のご協力を頂きました。深く感謝いたします。

大河内　勉、河野眞知郎、菊川英政、木村美代治、斎木秀雄、宗臺秀明、田代郁夫、継　実、原　廣志、福田　誠、馬淵和雄、宮田　真

（五十音順）

1. 中央平野部の遺跡群

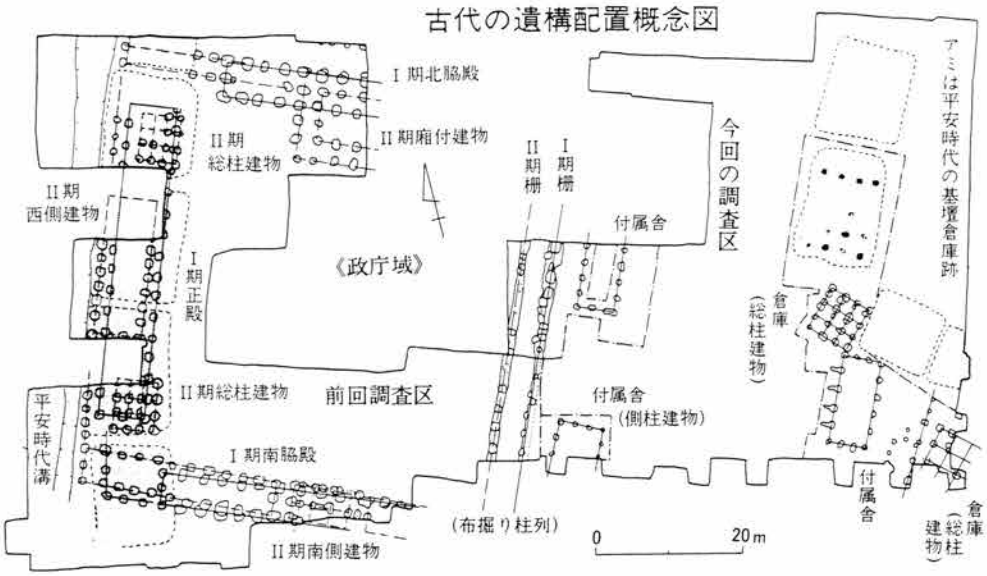
● 頼朝以前の鎌倉

頼朝が入る前の鎌倉の様子は文献史料からではよく判りませんでした。ところが御成小学校内発掘調査[地点12]で、古代鎌倉の研究上画期的な大発見がありました。昭和59年から平成４年にかけて行われた５次にわたる調査で、８世紀から10世紀の大規模な建物跡や掘込基壇が検出され、また建物跡の一隅からは天平五年銘の木簡が出土するなど予想もしなかった成果が得られたのです。これらのことからここには奈良時代の郡衙（郡役所）の中心建物（政庁）と高床式の倉庫があったこと、そして平安時代には大型倉庫が建ち並んでたことがわかりました。御成小学校の敷地は律令制時代の鎌倉の中枢部であり、かけがえのない遺跡であることが証明されたのです。

発見された総柱建物（平成３年）

御成小学校出土の木簡
（表）糒五斗天平五年七月十四日
（裏）郷長丸子□□

糒（ほしいい）は乾燥米のことで、非常用あるいは軍事用の食料として使われました。天平五年（七三三）、この地に糒を収蔵したと思われ、相模国鎌倉郡の郡衙の存在を裏付ける貴重な史料です。



奈良時代の政庁域と倉庫群（今小路西遺跡・平成３年）

● 八幡宮造営前の風景

鶴岡八幡宮境内の鎌倉国宝館改築に伴う調査[地点23]で、八幡宮創建以前の意外な史実が判明しました。境内造営時の整地層を除去した下には11世紀代の水田跡が検出されました。その北側の一段高い所に12世紀中頃の墓地が発見され、そこには夫婦と思われる二体の男女合葬人骨が西を向いた姿で葬られていました、男女共に壮年期後半の人で、筋付着部が良く発達しかなりの労働に携わっていたようです。また墓地の周りで木製五輪塔などの塔婆が出土しており、仏教の作法通りに埋葬された有力者と考えられます。頼朝が墓地の存在を意識した上で八幡宮用地として選地したのか、或はこの「有力者」と何らかの関係があったのか、興味をそそられるところです。

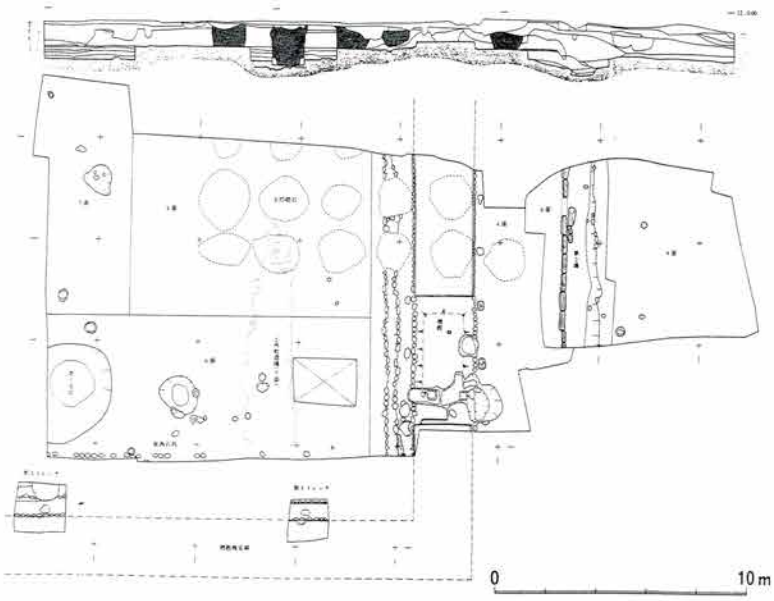
発見された男女合葬墓（現国宝館・昭和57年）

● 鶴岡八幡宮境内の調査

史跡鶴岡八幡宮境内の発掘調査は昭和41年に行われた二十五坊跡の調査に始まり、近代美術館分館（史跡外）直会殿、研修道場、国宝館収蔵庫、鶴岡文庫、休憩所、斎館などの用地を対象にして行われました。これらの調査によって考古学からみた八幡宮の姿が、部分的ですが明らかになりつつあります。直会殿（地点22）では豊臣秀吉の修営目論見絵図（天正19年）に描かれた回廊に合致する基壇や創建時の参道が、また研修道場（地点24）では三方堀などの重要遺構が発見されました。写真の鶴岡文庫（地点25）では戦国時代頃の二十五坊遺構が検出されています。この他に大石段の改修工事に際した調査では元禄大地震直後の状況が調査されています。

僧坊跡（現鶴岡文庫・昭和61年）

近世の源氏池（現斎館・平成5年）



下宮廻廊の一部と推定ライン（現直会殿・昭和54年）

● 幕府跡など

〈大倉幕府〉　治承4年（1180）から嘉禄2年（1226）までの半世紀近くにかけて存続したとされる大倉幕府（将軍の御所）は、源頼朝によって開かれた我が国で史上初めての幕府の跡として記念すべき遺跡です。周辺には北条義時や政子などの有力御家人の館が建ち並ぶ、中世都市鎌倉を象徴する中枢区域でありながら、残念なことに本格的な調査が行われないまま現在に至っています。

〈宇津宮辻子幕府〉　若宮大路の東側、宇津宮稲荷の辺りが宇津宮辻子幕府跡と推定されています。嘉禄元年、北条義時が地割りを定め新しい御所が建てられました。嘉禎2年（1236）北側に移転しそこを若宮大路幕府とするのが従来の説でしたが、この移転は同一邸内のことで二棟の御所を考えるべきとするのが有力です。

大倉幕府跡内トレンチ調査（清泉小学校内・平成2年）

掘立柱建物跡（カトリック雪ノ下教会内・平成4年）

〈北条小町邸跡〉　北は横大路、西は若宮大路、東は小町大路そして南を清川病院から小町大路に抜ける小路で囲まれた一画は、北条泰時や時頼の邸跡とされています。遺跡内での本調査は８件あり、６件が各大路沿いで行われました。そこでは角柱や横板で土留めをした幅２ｍ近くの堀が発見され、鎌倉の要路は両側を堀で区割りしていたことが判りました。堀の中からは数点の木簡が出土し、文面から幕府が御家人に堀を築造するための工事分担を課していたことが判明したのです。鎌倉幕府の機構を解明する貴重な発見でした。

若宮大路側溝の築造に関わる木札は、文献史料に見られる御家人役の具体的な様子を示す実例として、幕府の所在地ならではの、一級の資料とされています。

建物跡（平成元年）

若宮大路の側溝（昭和61年）

● 政所から杉本寺

政所：幕府の財政、訴訟などを司る機関である政所の跡は八幡宮東側と推定されます。遺跡南西隅の調査（地点20）では集積したかわらけの束が発見され、政所の宴会用器の置場ではないかと話題を呼びました。

東御所：鎌倉宮参道沿いの調査（地点28）で、大倉幕府の東方にあった「尼御台所（政子）御第」である「東御所」と考えられる大規模な建物跡が発見されました。

杉本寺周辺遺跡群：二階堂運動広場内（地点32）の調査で鎌倉時代初期の、薬研堀や道路を伴う建物跡を検出しました。建物は六浦路沿いを固める御家人の屋敷と思われ、和田一族の屋敷とする説もあります。

推定東御所跡（平成３年）

政所跡内で発見された多量のかわらけ（平成２年）

大規模な屋敷跡（平成２年）

● 御家人の宿所か

御成町の自転車駐車場と在宅福祉サービスセンター用地の調査[地点13]で、13世紀前半から14世紀後半にかけての4時期にわたる遺構面が検出されました。中でも13世紀中半か後半期の第3面上に残る掘立柱建物は、堅固な土間や複数の囲炉裏、板壁や通路に仕切られたいくつかの小部屋をもつ五間四方の規模で、傍らには物置的な小建物がありました。居住、炊事、作業に適した空間を完備したこのコンパクトな建物は、交替で「鎌倉番役」を勤める御家人達のための「宿所」ではないかとする説があり、建築史的にも注目されます。

推定宿所跡（平成4年）

● 都市鎌倉の一断面

御成小学校の発掘調査[地点12]で得られた大きな成果の一つは、中世鎌倉の町並み構成が判明したことです。校庭側には南北に隣り合って並ぶ大きな大名屋敷がありその前面（東側）は門前を固めるようにして被官たちの居宅が建ち並びます。南側屋敷の東門から延びる道路は途中でT字状に交差しますが、そこには職人や商人など庶民の住居と仕事場でもある半地下式の建物や井戸などと、鎌倉石を用いた頑丈な造りの半地下式倉庫群とが道路によって整然と区割りされていました。武家屋敷とその前面に広がる機能別に区分された町並みから成る、「都市鎌倉」の具体的な実像が初めて明らかになったのです。

（写真は平成3年調査）

門前の小屋敷

街路と町屋

倉か？地下室か？

● 市街地の石倉

鎌倉石の切石を床や壁材とした半地下式の倉庫跡の発見例は少なくありません。中でも注目されるのは鎌倉警察署と蛭子神社[地点14・15]の間で検出した大型の遺構で、その規模や構造からみて石倉とも呼ぶべき地下式倉庫です。小町大路や滑川を使って搬送した物資を、八幡宮方面の中心域へ運び込むために造られた集積施設と考えられます。倉庫業を営む有力者が経営したのでしょうか。

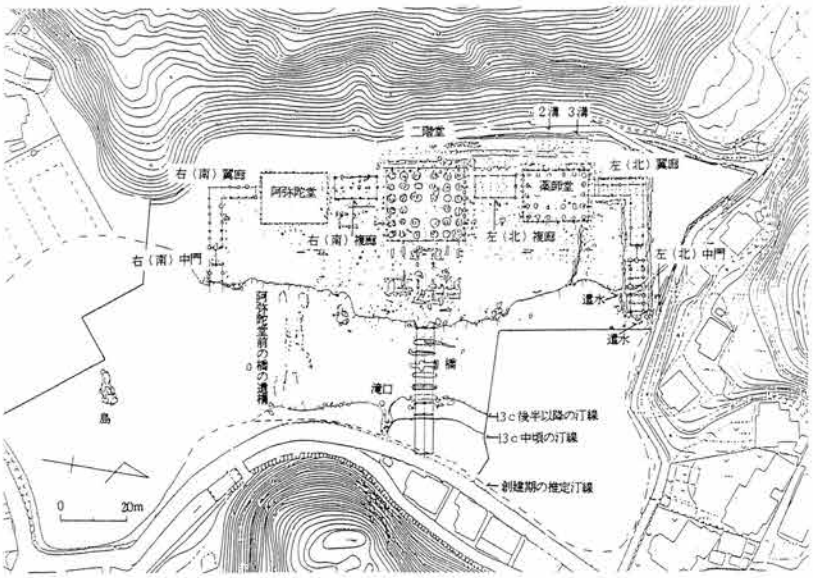
大がかりな石造りの倉（平成5年）

2. 谷戸（やと）内の寺々の遺跡

● 平泉から鎌倉へ

永福寺（地点33）は源頼朝が建てた荘厳華麗な大寺院で建久５年（1194）までに二階堂・阿弥陀堂・薬師堂の三堂が完成しました。創建の目的は源義経、藤原泰衡ら諸将の怨霊をなだめるためとされます。頼朝が実見した平泉中尊寺の大長寿院（二階大堂）等を模して建てられた永福寺は、平泉から鎌倉、古代から中世への文化の継承を象徴するモニュメントといえましょう。遺跡は昭和41年国指定史跡の指定を受けました。58年から行われた発掘調査で三堂と苑池のほぼ全容が解明され、現在は整備計画の策定中です。鎌倉で初めての史跡公園が実現する日も遠くありません。

永福寺跡

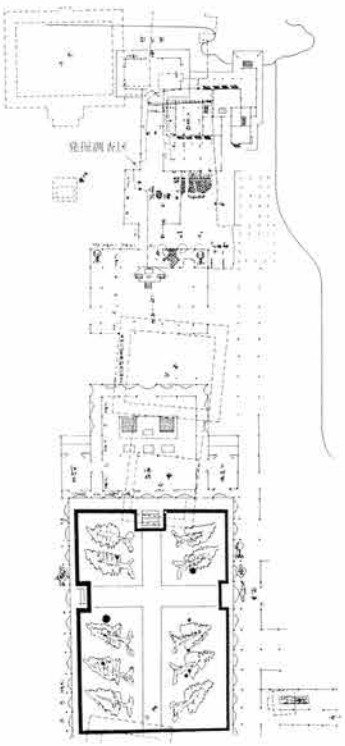


薬師堂跡（昭和61年）

二階堂正面の橋（平成５年）

永福寺出土瓦

● 禅宗の巨刹



建長寺境内発掘

建長寺は、建長５年（1253）創建の日本で最初の禅宗専門道場です。鎌倉時代末期に作成された建長寺指図には、中軸線上に並ぶ山門・仏殿・法堂・方丈の両側に庫裡・僧堂・浴室などを配した左右対象の宋様伽藍配置の寺容が描かれています。宗務本院用地（地点39）の調査で、建物の床面に鎌倉石の切石を斜めに敷く「四半敷」が発見され指図の法堂に該当することが判明しました。史料と遺構とが合致した珍しい例です。鎌倉学園は塔頭の玉雲庵跡にあり、体育館用地（地点40）の調査で岩盤面上の建物や地下式壙などの遺構と、柿経や木製小五輪塔型蔵骨器など仏教文化史研究上貴重な遺物が出土しました。

法堂の四半敷（昭和61年）

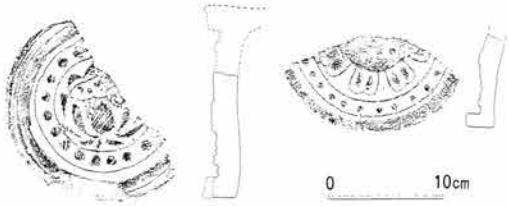
柿経（平成５年）

小五輪塔型骨蔵器（平成５年）

● 極楽寺の大伽藍

極楽寺は正元元年（1259）の創建で、開山良観房忍性が入寺した文永４年（1267）以降に寺容が整いました。極楽寺古絵図によれば総門・金堂・講堂などの主要伽藍の他に四十九院の支院が描かれ、寺域も広範囲に及んでいます。昭和50年、稲村ケ崎小学校内（地点２）の調査で講堂の一画と思われる壇正積基壇が発見され、また第二校庭の試掘でかなりな規模の石垣が検出されるなど、寺史にふさわしい壮大な寺院の様相を発掘によってうかがうことができました。江の電車両検査場（地点１）地は古絵図中の金剛院や観音院辺りと推定されますが、調査により基壇や礎石建物、池の跡そして大量の瓦の集積場などが発見され、貴重な成果が得られました。

基壇状遺構（車両検査場・平成６年）



● 幻の尼寺智岸寺

智岸寺跡は英勝寺の北の谷にあります。かつては臨済宗の尼寺で、小田原北条氏の時代には東慶寺の隠居所だったようです。谷入口部の社員寮用地（地点37）の調査で上下二段の岩盤面を検出し、上段では蓋石付きの排水溝などがありました。下段には崖をくり抜いた水の湧く横穴と建物があり、銭洗弁天のような参拝場との説があります。また東側の武蔵大路周辺遺跡（地点38）では井戸の中から、田楽を舞う人物を描いた漆器が出土しました。

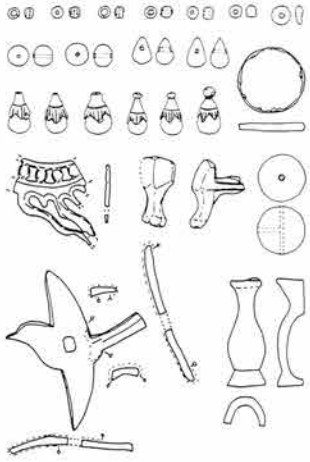
上段遺構（昭和63年）

下段遺構

● 修験僧と仏堂

名越山王堂は京都蓮華寺の山王霊験記の中にその姿が描かれています。研修施設用地（地点30）の調査では、鎌倉時代後期のやぐら状遺構と室町時代の基壇上礎石建物が発見されました。やぐら状遺構の主室部床面上に厚く堆積した炭の中から鳥形銅製品、数珠玉、ガラス製品や各種陶磁器などの「高級品」が数多く出土しています。修験僧が火を焚きながら投げ入れたのでしょうか。五間四方の礎石建物はその形状から、円覚寺舎利殿によく似た禅宗様仏堂建物と判断されました。この遺構は関係者のご協力をいただき、敷地内の別な場所に移して保存することができたのです。

やぐら状遺構（平成２年）



出土品図集Ｓ：1／2

● 山腹をうがつやぐら群

新善光寺跡やぐら

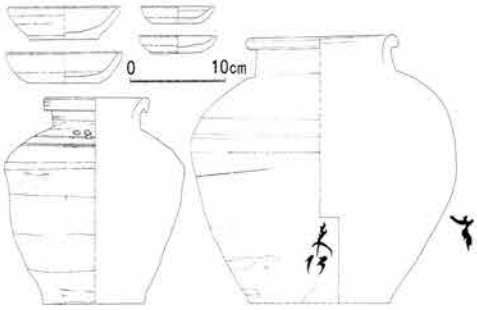
新善光寺に関しては金沢文庫文書に、当寺の住持が大仏造営の大勧進なったとあります。また葉山町の新善光寺は天正18年（1590）に当寺が移ったものといわれます。防災工事に伴う調査[地点29]で発見されたやぐらの床面は写経石が敷かれ、中央部の納骨穴には完品の白磁壷が納められていました。壷は中国元代の製品で、高僧クラスの墓所と考えられます。

やぐら全景（昭和62年）

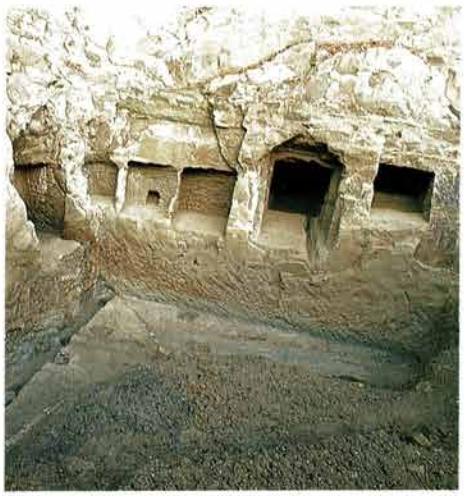
白磁壷出土状況

松谷寺跡やぐら群

松谷寺と松谷文庫の開基は北条時盛と考えられます。松谷文庫については、金沢文庫史料によって近年その所在が明らかにされました。金沢文庫と同じ図書館的な学問所とされます。防災工事に伴う調査[地点35]で、13世紀後半期から14世紀代の13穴のやぐらが発見され、多数の石塔類や蔵骨容器等が出土しました。やぐらの前面域には建物跡があり、寺奥の聖域を構成する場所であったようです。



やぐら出土遺物（平成５年）



やぐら群全景

● やぐら以外の墓も

尾根上の墓地

やぐら以外の葬法の一つに火葬骨を納めた容器を眺めの良い山の尾根上に埋め込むスタイルがあります。浄明寺釈迦堂跡[地点31]や大町八雲神社裏では屋根を削った岩盤面に穴をうがち常滑壷等を埋納していました。

お堂内の墓所

長谷寺観音堂[地点3]の床をはがしたところ岩盤をうがった穴の中に、人骨を納めた常滑の大甕や火葬骨を入れた壷が発見されました。火葬骨には墨で梵字が書かれています。観音様に見守られた清浄な地を墓所としたのでしょうか。

源氏山の墓地

土壙墓が発見された仮粧坂上の源頼朝像前辺り[地点36]は、幕府が定めた商業地区の一つ気和飛坂山上に当たります。また仮粧坂の名は生死の境を意味するといわれ、市場と墓地とが一体となった情景を示す好資料です。

釈迦堂跡（昭和62年）

長谷寺（昭和59年）

埋葬された人（平成２年）

3. 浜辺の遺跡群

● 浜地の変遷

浜地は庶民の住居と墓地とが渾然とした無秩序的な場と思われがちでしたが、これを覆す発見がありました。調査地点8内には東西に走る中世の道路があり、これに沿って鎌倉時代中期には陸揚げした物資の保管倉庫である掘立柱建物群が建ち並びます。次の鎌倉時代後期から南北朝時代にかけては道路と小路による区割りの中に、方形竪穴建物群があり、遺物に栗形（刀装品）の骨材や硯、砥石の石材が多いことから工房を兼ねた家屋や倉庫と考えられます。中世の浜地は活気に溢れた流通生産の場でした。近世になると方形の塩田遺構が出現し、浜地の役割は大きく変わったのです。

鎌倉時代中期の掘立柱建物（大蔵省印刷局・平成5年）

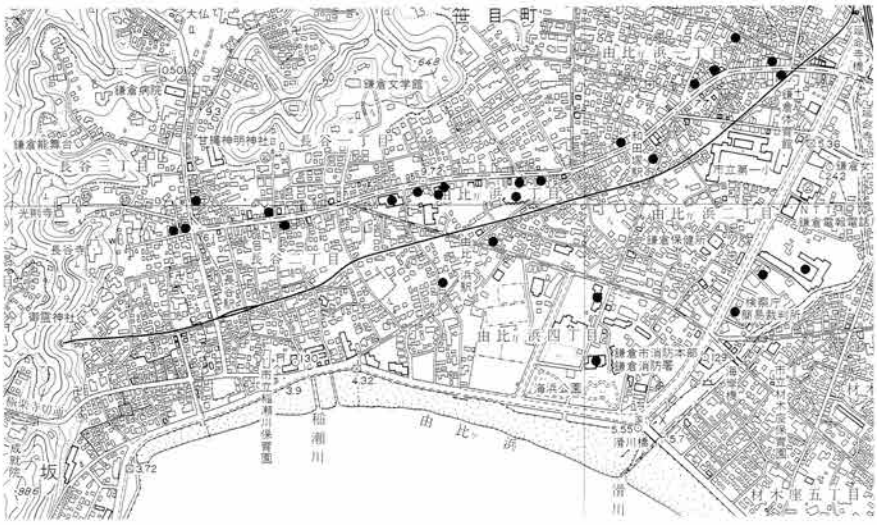
鎌倉時代後期の方形竪穴建物

浜地に残る液状化痕

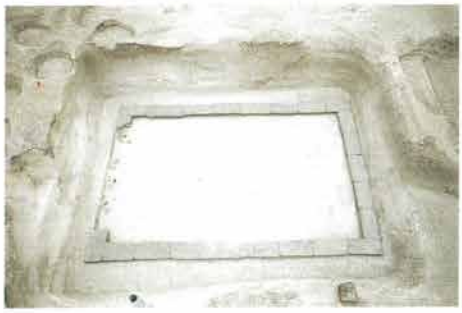
由比ケ浜駅（地点6）近くで発見された方形竪穴建物の壁に残る噴砂痕は、正嘉元年（1257）年か永仁元年（1293）の地震である可能性が指摘されています。

● 由比ケ浜－長谷の町屋域

鎌倉幕府は建長3年と文永2年に、商業を営む場所として町屋を定めました。それだけ鎌倉は商業活動が盛んだったのです。町屋を象徴する遺構が、半地下式の方形竪穴建物です。方形竪穴建物の規模構造は多種多様で、住居を兼ねた工房または倉庫が主な用途と考えられます。現在までに市内で約800軒が検出され、その大半の500軒以上が由比ケ浜から長谷にかけての地域に集中しています。六地蔵から長谷寺に至る長谷小路周辺での調査では多数の方形竪穴建物が見つかっていますが、出土遺物に牛馬の骨や鹿の角などを加工するために切断した骨片や栗形などの骨製品が大量にあります。また多量の炭と鉱滓の中に鞴の羽口が出土することから鋳物師の存在が判ります。長谷小路の周辺は、装飾用具等を生産・加工し更に売買する、手工業者たちの職人街だったのでしょう。



長谷小路を中心とした調査地点



方形竪穴建物（昭和60年）

掘立柱建物（平成7年）

● 倉が建ち並ぶ浜辺の流通センター

一ノ鳥居西側の若宮ハイツ用地[地点9]調査は、浜地の特性を代表する遺跡の一つです。約3,800㎡の調査地で検出された方形竪穴建物は190軒以上にも及び、他に多数の井戸や墓壙が発見されました。建物の多くは大型で用途は倉庫と考えられます。調査地東側の滑川沿いには道路が走り、西側の若宮大路との間は無数の轍痕が残る「広場」となります。滑川から陸揚げした大量の物資を一時保管した後、荷車で市中へと搬送するための「流通センター」跡と判断できましょう。下層からは古代の祭祀跡や鎌倉時代前半期の建物や墓壙、柵列が見つかりました。中でも円弧状の柵列は流鏑馬や笠懸、犬追物を行う馬場である可能性があり、「商業化」する前の浜地の在り方を示唆する貴重な遺構です。

下層概念図

上層概念図

（若宮ハイツ・平成2年）

荷車往来の轍

倉庫群の一つ

集められた人骨

土壙墓

骨細工職人

長谷小路南[地点5]遺跡では栗形の完成品や未製品、削りカスなど製造過程を示す一括資料が出土しました、ここでは栗形以外の製品がなく専業職人がいたのです。市内では他に笄、サイコロ、刷毛の軸などの製品や刻みのある製作途中骨材が出土します。骨細工は主要産業の一つでした。

鋳物師

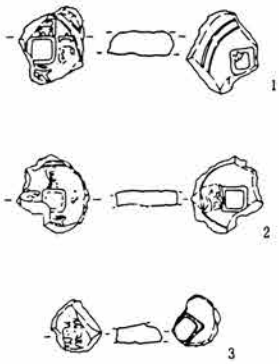
鎌倉は大仏に象徴されるように鋳物師が活躍する舞台です。長谷小路沿いは鍋・鏡などの鋳型や鋳造遺物の出土が多く、鋳物師の住居兼工房が建ち並ぶ街でした。また鏡の鋳型は、やぐらや地鎮遺構から出土する鏡が鎌倉で作られた可能性と、鋳物師の技術の高さを示す好資料です。

ニセ銭作り

市内で出土する大量の銭は都市の繁栄振りを裏付けますが、室町時代になると激減してしまいます。長谷小路[地点11]で15世紀の井戸から模鋳銭とその鋳型が発見されました。模鋳銭の出土例は京都と堺にありますが、それと比べて粗末な出来です。窮乏の余りニセ銭作りに手を出す鋳物師がいたのでしょう。

牛や馬の加工骨

フイゴの羽口



ニセ金の鋳型実測図

4. 鎌倉をとりまく山々の遺跡

● 2万年前の鎌倉人

鎌倉で最初に発見された旧石器時代の遺物は、昭和30年頃に大船の小袋谷切通し工事で関東ローム層中から出土した黒曜石製石器です。昭和44年には切通し北側の粟舟山造成工事現場で頁岩製のナイフ形石器が採集され、常楽寺の裏山一帯は1万年以上も前から人間が生活した最古の遺跡と認識されました。その後旧石器遺跡の発見は途絶えていましたが、城廻の調査[地点46]で古墳時代や縄文時代遺構の下の関東ローム層中の黒色土層から黒曜石製の石器2点と剥片8点が出土し、太古の鎌倉の新しい資料が得られました。これは鎌倉では初めて正式な調査で判明した旧石器遺物で、その形態や出土層から1万8千年～2万年前と推定されます。

縄文時代の調査終了後、関東ローム層中の旧石器文化層を検出するために、方眼状に調査区を設定して調査をすすめました。約2m掘り下げたところ、黒色の土層中で石器が発見されたのです。（玉縄城跡・平成7年）

剥片石器
黒曜石の原石で石器を作るときに剥離した破片を素材にした石器。

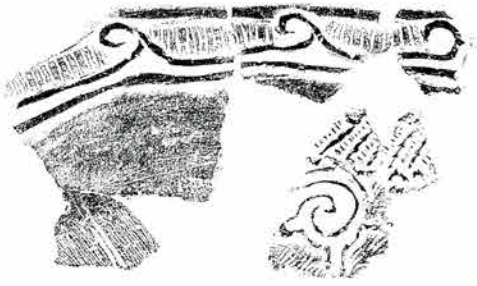
有舌尖頭器
刺突用の石器と考えられます。

● 縄文時代の竪穴住居址

縄文時代の竪穴住居址　寺分富士塚遺跡（昭和63年）

埋甕

縄文時代は温暖な気候と恵まれた自然環境の中で、9千年前頃から7千年近く続いた悠久なる時代です。鎌倉にもこの時代の遺跡は関谷から山崎方面の柏尾川流域を望む台地上に多く分布し、関谷東正院遺跡・島ノ神遺跡、手広八反目遺跡、玉縄平戸山遺跡などが調査され、主に中期から後期にかけての集落跡が発見されました。けれども残念なことに大部分の遺跡は、昭和40年代の宅地開発等によって調査されることもなく消滅してしまったのです。中でも富士塚遺跡[地点42]は中心的な集落遺跡で、工事現場には無数の土器や石器が散乱していました。近年、辛うじて残っていた一角を調査したところ埋甕炉をもつ縄文中期の住居跡を3軒発見し、大集落の姿をかいまみることができました。

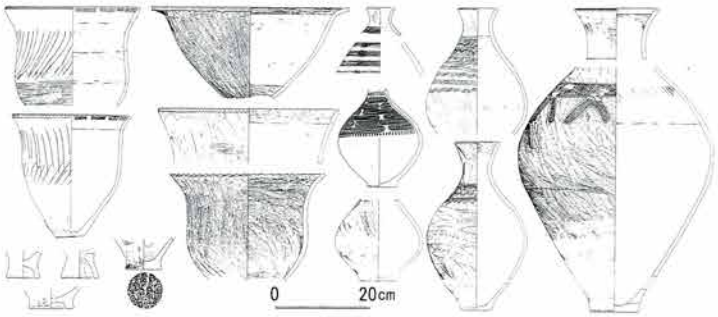


炉の中に埋めて、火鉢のように使われた縄文時代中期の土器の拓影

● 弥生の集落

遺構配置図（手広八反目遺跡・昭和59年）

鎌倉の弥生時代遺跡の多くは縄文遺跡と同じような立地にありますが、後期後半から末期には肥沃な低湿地を求めて平地部にも集落が現れます。鎌倉地区では大倉幕府跡周辺の微高地上で、中世遺跡の下に弥生住居が発見される例が少なくありません。手広八反目（地点41）では柏尾川に面した台地北斜面上に、25軒の中期から後期の住居跡が検出されました。特に後期の久ケ原期住居は12軒で、この時期が最盛期となります。生活に不適な北向きの斜面に集落を形成するのは、水稲耕作に適した柏尾川沿いの低湿地を必要としたからでしょう。

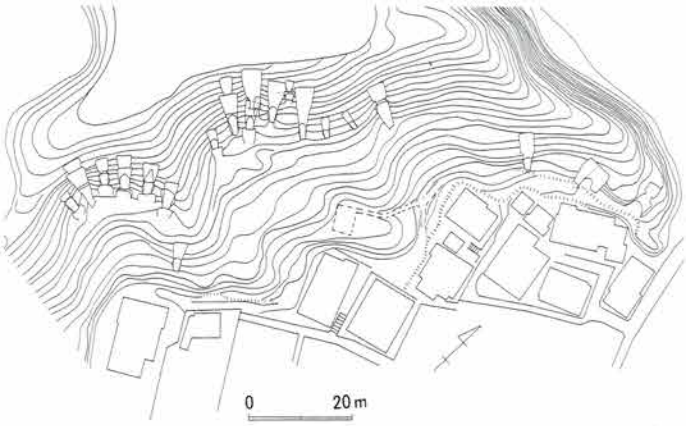


弥生時代の土器（15号住居址）

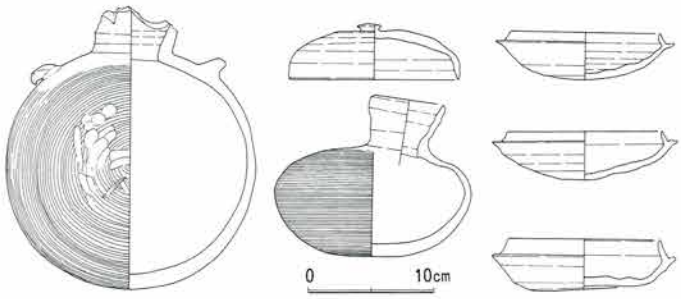
● 古代の集落と横穴墓

古代集落遺跡（岩瀬上耕地遺跡・平成元年～3年）

岩瀬方面は考古学的調査が希薄でしたが、上耕地遺跡の調査で新たな事実が明らかになりました。調査地は標高54mの丘陵で、頂部には縄文時代早期の集石遺構があり約7千年も前の営みが判明しました。また弥生時代から奈良時代の古代集落の存在を示す竪穴式住居址が、頂部から北斜面にかけて27軒検出され、更に丘陵の東斜面には古墳時代末期（6世紀末～7世紀初頭）の横穴墓が21基あり、岩瀬の古代史解明の第一歩となる調査でした。横穴墓は岩瀬から大船熊野神社にかけての山間に多数分布し、今後は広範囲の調査が必要でしょう。なお北斜面では戦国時代の建物が発見され、大長寺と後北条氏との深い繋がりからも、この地が鎌倉街道沿いの要衝であった可能性が考えられます。



横穴墓群の分布



横穴墓出土の遺物（須恵器）

● 戦国時代－近世の鎌倉

戦国時代の鎌倉

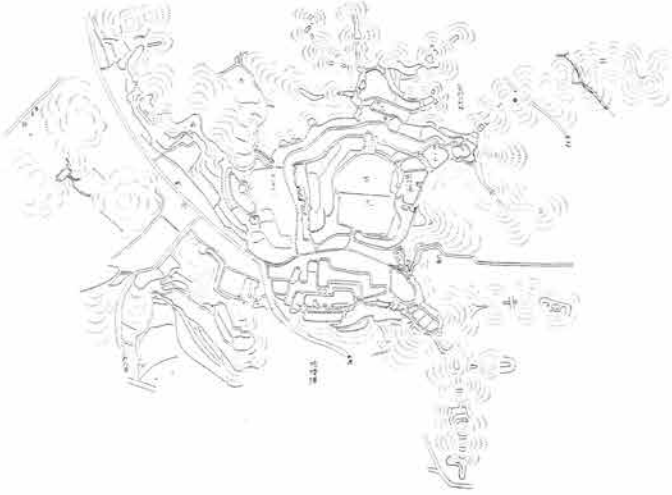
幕府滅亡後の鎌倉には鎌倉府が開かれ、関東十国の首府として栄えました。しかし享徳４年（1455）室町幕府方に攻められた五代公方足利成氏が下総古河（茨城県）に逃れてから、鎌倉は急速に衰微してしまいます。この鎌倉の庇護者として登場するのが小田原北条氏です。北条早雲は永正９年（1512）三浦氏攻略の拠点として玉縄城を築城すると共に鎌倉を支配下におきました。続く氏綱・氏康は鶴岡八幡宮の堂社を再建するなど、鎌倉の社寺の復興に力を尽くします。雪ノ下の関取橋（地点27）では、氏康が荏柄天神社の修理のために六浦路を通る商人から関銭を取った関所と思われる礎石建物跡が発見されています。

玉縄城

玉縄城は「此城当国無双の名城なり」と称せられた堅固な城で、永正９年の築城から天正18年（1590）豊臣秀吉による小田原攻めで開城するまで、一度として戦闘により落城したことはありません。最後の城主北条氏勝が徳川家康に降伏した後は家康の家臣水野忠守が城を預かりますが、元和５年（1619）に廃城となります。その後は松平正綱が玉縄領を預かり城南の地に陣屋を構えますが、元禄16年（1703）三代目正久の転封に伴い玉縄陣屋は廃されました。寛政４年（1792）、松平定信が海岸警備のため玉縄城の再建を建議しますが実現には至りません。この歴史豊かな玉縄城跡は各種の開発により旧状が損なわれてしまいましたが、まだ多くの遺構が残っており現在までに12件の調査が行われています。特に陣屋坂東側（地点45）では城郭内の家臣団屋敷地の存在を示す掘立柱建物跡が、また西側（地点44）では松平氏の陣屋跡と目される16～18世紀の建物や庭園等の注目すべき遺構が発見されました。

若宮大路で発見された鳥居の遺構は、北条氏康による天文22年（1553）の再建と推定されます。構造は芯材、中間材、外周材から成る三重の寄木造りで、直径約160cmもあります。また各部を契（ちぎり）で結合し材質はヒノキやケヤキが用いられていました。

浜の大鳥居



玉縄城跡

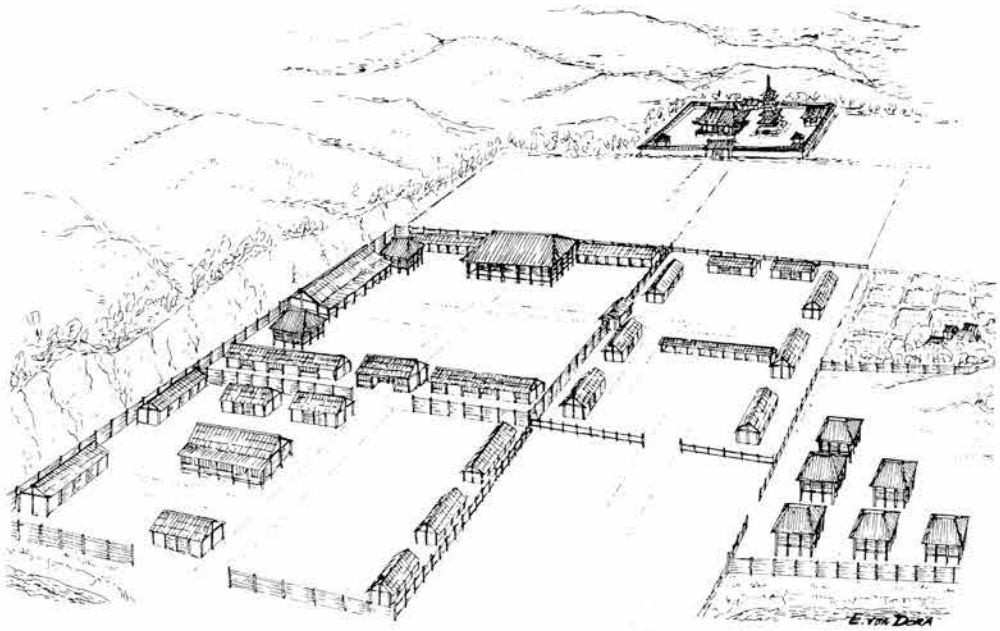
破壊される前の玉縄城本丸の雄姿

調査区と遺構配置図（昭和62年）

5. 埋蔵文化財の調査・保存・活用

● 大地からのメッセージ

埋蔵文化財は「人類が生存する上で欠くことのできない生活環境を自然と共に構成する重要な要素」として、国民全てが共有するかけがえのない財産です。しかしこの財産を守り後世に伝えるためには、数限りない難関を越えなければなりません。御成小学校の改築問題は、実に10年以上をかけて遺跡と校舎の共存を模索してきました。そして市民と行政が共に叡智を結集して、共存を可能せしめる回答を導くことができたのです。これは今後の遺跡保存の在り方を示す光明となるでしょう。



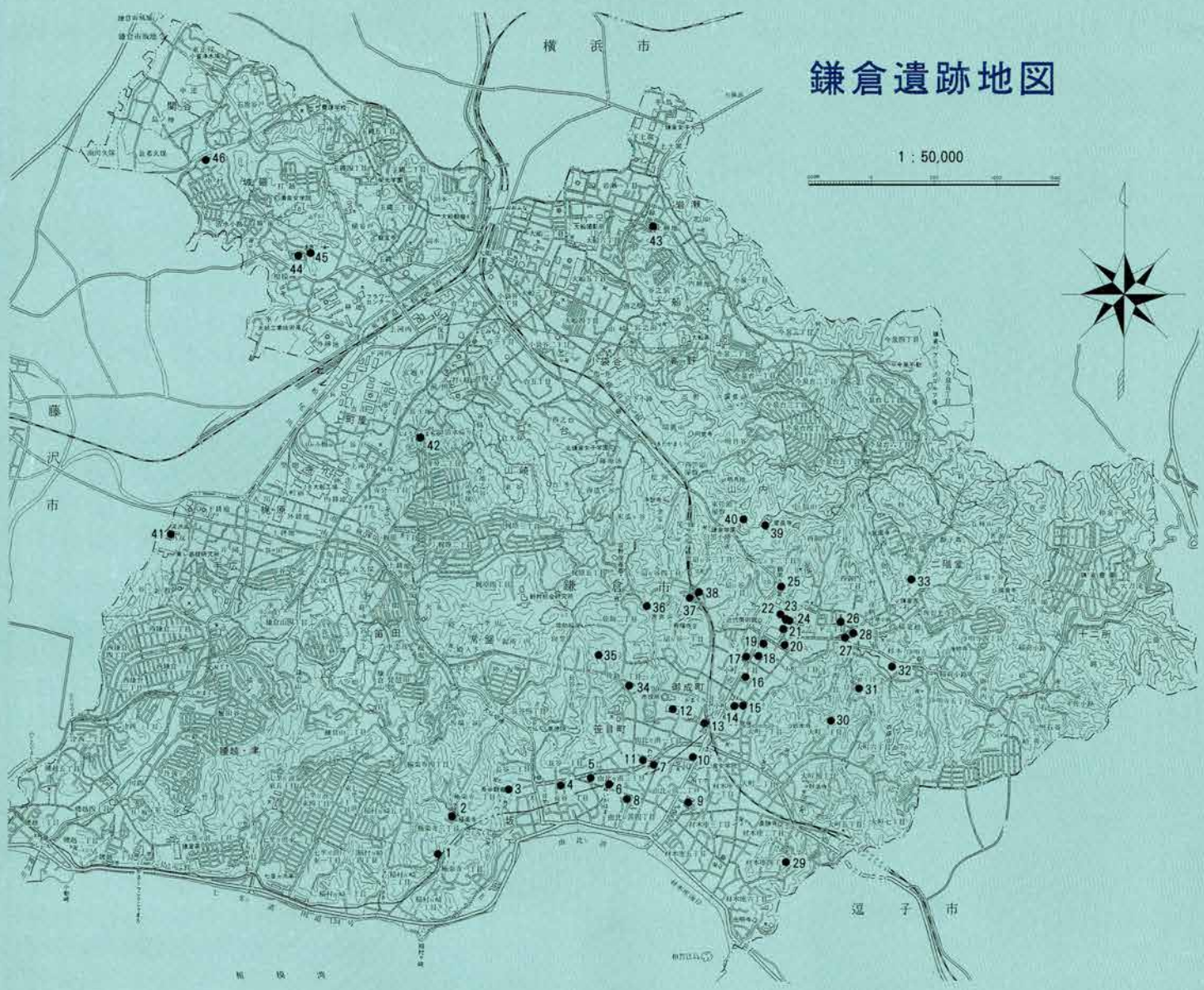
鎌倉郡衙（想像復原図）

永福寺復原模型

現在鎌倉では年間約30件の発掘調査が行われ、全国的にも２万件近い数に上りますが、その殆どが工事等による破壊を前提に記録保存を目的とした「緊急調査」です。遺跡は調査・保存し更に整備することで、初めて現代と未来に活かすことが可能となります。市では二階堂の永福寺跡を、鎌倉で最初の史跡公園とするために昭和58年度から発掘調査を進め、このほど苑池や橋、翼廊などの復原を主な柱とする整備基本構想をまとめました。永福寺の美しい庭園が蘇る日も遠くありません。

遺跡は「大地に刻まれた年表」です。そこには過去からの無限のメッセージが込められています。より良い未来を築くためには、メッセージを正しく分析し後世に伝えなければなりません。人類社会が続く限り、温故知新は繰り返されるでしょう。この小冊子で紹介した各遺跡では、様々なメッセージを掘り起こすことができました。これからも引き続き皆様にお伝えして行く予定です。

発掘調査見学会



《掲載遺跡名称一覧》

1 極楽寺旧境内遺跡
2 極楽寺中心伽藍跡
3 長谷観音堂
4 長谷小路周辺遺跡
5 長谷小路周辺遺跡（長谷小路南遺跡）
6 長谷小路周辺遺跡
7 長谷小路周辺遺跡
8 由比ケ浜中世集団墓地遺跡
9 由比ケ浜中世集団墓地遺跡
10 下馬周辺遺跡（史跡若宮大路）
11 今小路西遺跡
12 今小路西遺跡（御成小学校内）
13 若宮大路周辺遺跡群
14 若宮大路周辺遺跡群
15 若宮大路周辺遺跡群
16 宇津宮辻子幕府跡
17 北条時房・顕時邸跡
18 北条小町邸跡
19 北条小町邸跡
20 政所跡
21 鶴岡八幡宮旧境内遺跡（斎館用地）
22 鶴岡八幡宮旧境内遺跡（直会殿用地）
23 鶴岡八幡宮旧境内遺跡（国宝館用地）
24 鶴岡八幡宮旧境内遺跡（研修道場用地）
25 鶴岡八幡宮旧境内遺跡（鶴岡文庫用地）
26 大倉幕府跡
27 大倉幕府周辺遺跡群
28 大倉幕府周辺遺跡群
29 新善光寺跡内やぐら
30 名越山王堂跡
31 釈迦堂遺跡
32 杉本寺周辺遺跡
33 史跡永福寺跡
34 佐助ケ谷遺跡
35 松谷寺やぐら
36 亀谷山王堂跡
37 智岸寺跡
38 武蔵大路周辺遺跡
39 建長寺旧境内遺跡（法堂跡）
40 建長寺旧境内遺跡（玉雲庵跡）
41 手広八反目遺跡
42 寺分富士塚遺跡
43 岩瀬上耕地遺跡
44 玉縄城跡
45 玉縄城跡（陣屋跡）
46 玉縄城跡

鎌倉の埋蔵文化財 1

発行日　平成8年3月
編集・発行　鎌倉市教育委員会
印刷　中川印刷株式会社